

猪熊雄治編『夏目漱石『こころ』作品論集近代文学 作品論集成?』

著者	徳永 光展
雑誌名	比較文化
巻	8
ページ	136-144
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000697/

猪熊雄治編『夏目漱石『こころ』作品論集 近代文学作品論集成③』（クレス出版 二〇〇一年四月二五日発行 三九二頁）四八〇〇円（ISBN）四一八七七三三一〇六一九

徳永光展

一九八〇年代以降、夏目漱石『こころ』に関する研究は爆発的な活況を呈し、文献の膨大化が研究状況の全貌把握を極めて困難にしまっている。論文数を国文学研究資料館編『国文学年鑑』（至文堂）で検索してみても、二〇年にわたって『こころ』論と名打った文献が十指を下らない年はない。『こころ』論の新たな書き手は作品そのものにどう向き合うかという問題に加えて、膨大な研究論文をどう読み、自らの論を研究史の中に位置付けるかという問題にも切実に直面するのである。その意味で、夏目漱石『こころ』の作品論一八編に編者「解説」を付す本書が研究史への道標を得るための必読文献となることは疑い得ない。採録文献の選定に際する基準それ自体が編者による研究史観と言える訳であり、後学に資する所は大きい。

編者が「解説」で述べる通り、本書に類する論文集として、玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第十巻 こころ』（桜楓社〈現・おうふう〉一九九一・四）が既にあ

り、そこには漱石門下の小宮豊隆に始まり、一九八〇年代に至るまでの代表的な論文が年代順に収録されている。その後も一九九一年にシンガポール国立大学で開催されたシンポジウムの論文集、平川祐弘、鶴田欣也編『漱石の『こころ』 どう読むか、どう読まれてきたか』（新曜社一九九二・一一）、一九九二年に東北大学で行われた様式史研究会での原稿を骨子とする小森陽一、中村三春、宮川健郎編『総力討論 漱石の『こころ』』（翰林書房 一九九四・一）、雑誌『漱石研究』第六号の『こころ』特集（翰林書房 一九九六・五）など、まとまった研究成果は相次いで出版されている。本書はそのような『こころ』研究の状況に鑑み、ここ一〇年の研究動向の把握に力点が置かれ、採録論文一八編中一二編が一九九〇年代以降のもので占められた。また、本書に採録されてはいなくとも、収録諸論文の末尾に記された注で多く引用されている文献は研究史把握に際して見落としてはならないものであり、それらの文献にも当たっていくことで、研究史を概観できる利点も見逃せない。

さて、以下に論文を見る視点を示し、収録論文を概観してみた。作品は大正三年に朝日新聞に発表されたが、当時のコンテキストに戻し、その時代的雰囲気や議論しようとする姿勢にあるかどうか。当時に戻すとすれば、当時の資料が引用されることになる。同様にして、作者の意図を

意識するならば、漱石の日記、書簡、ノート等に残された断片、講演記録などが資料として引用される。先生の自殺に倫理的罪意識を見る読みは同時代評から漱石山房に出入りしていた門下生に引き継がれたが、戦後の日本近代文学研究はそれらの倫理を問う読み以外の視点をどうやって提出していくかに焦点が当てられたと言っても過言ではない。その過程の中で、先生を始めとする登場人物に対する批判的な読みが台頭してくることもなる。作品は〈上〉・

〈中〉・〈下〉の三部構成であるが、作品全体の構成へ議論が進められ、先生と「私」を始め、人物間の関係性が議論されるようになり、また御嬢さん、K、奥さん、「私」の家族など、議論される人物も多彩な拡がりを見せるようになる。同時に構成上の欠陥・破綻も発見されるようになり、矛盾への説明が考えられる中で、先生が問題にする学生時代と遺書執筆の時間的懸隔にも目が注がれるようになってきた。

本論文集が玉井敬之「『こころ』をめぐって」(『日本文学』第八卷第三号 日本文学協会 一九五九・三/吉田精一編『夏目漱石必携』〈学燈社 一九六七・四〉/玉井敬之『夏目漱石論』〈桜楓社「現・おうふう」一九七六・一〇〉)で始まっているのは、編者によればそれが先生と「私」の関係性に着目している点にあるからだとのことである。作品全体の関係性を問おうとする姿勢の萌芽はまさ

に現在のテクスト論への胎動を思わせるものであるが、同時に倫理を追求する読みもまだ濃厚に漂わせている。タイトルとの類推から心理主義への傾倒も見られ、『文学評論』や「私の個人主義」など当時の人間・漱石の言説に絡めて論を展開しようとする姿勢も同時に見ることが出来る。その意味では作品の構造を問う姿勢と登場人物の倫理を問う姿勢が混在していると言える。同時代への逆行、作者への還元とも相まって、それらが入り混じる中に後の作品論研究への変化の胎動を見ることが出来るのである。

遠藤祐「こころ」(吉田精一編『夏目漱石必携』学燈社 一九六七・四)も作品の展開を要約・解説という執筆姿勢の中で「私」を論じ、続いて先生を論じ、両者の交渉に着目する。〈中〉から「私」を「新たな世代のひとり」とし、その「一閃」さに若さを見、懷疑性情に犯された先生とは異質として注目する。また、自己抹殺を必然とした先生は遺書執筆によって「私」の中で自らの「こころ」を生かすとして、ここでも遺書の倫理的評価に重点が置かれている。桶谷秀昭「淋しい「明治の精神」——『こころ』」(『文芸』河出書房 一九七〇・一〇)／『文芸読本 夏目漱石』(河出書房新社 一九七五・六)／桶谷秀昭『夏目漱石論』(河出書房新社 一九七二・四)／桶谷秀昭『増補版 夏目漱石論』(河出書房新社 一九八三・六)は同時代の文学や時代状況の検討を重視する。「明治の精神」に

当時の漱石の日記、断片、『文学論』序文、『木屑録』
 「私の個人主義」、森鷗外の「興津彌五右衛門」「空車」、
 また乃木大将や北村透谷の言説も引用しつつ迫る。「私」
 の年齢の考証も試みられ、阿部次郎を上限とし、芥川龍之
 介を下限とする世代の中間にいたとし、武者小路実篤など
 が具体的イメージとして想定される。つまり、先生が漱石、
 「私」がこれら次世代の文学者として想定されている。こ
 れは漱石門下の小宮豊隆や森田草平が自らを「私」に投影
 する読みにも通じるであろう。

浅田隆「明治の精神」周辺―漱石「こころ」私解―
 (国崎望久太郎博士古稀記念論集刊行会編『国崎望久太郎
 博士古稀記念 日本文学の重層性』(桜楓社「現・おうふ
 う」一九八〇・四))はKにせよ先生にせよ、その自殺に至
 る悲劇を閉ざされた自我に見ようとする。同時代へ戻った
 考察が漱石の日記、乃木希典の遺書、森鷗外「興津彌五右
 衛門」、新渡戸稲造の言説を通して行われ、乃木の殉死は
 同時代の雰囲気において武士道によるものと理解されてい
 た事実を発見する。しかし、それは「明治の精神」そのも
 のではなく、先生が重視しようとしたものは自己の倫理
 (道)を全うしようとする精神の形であったと解釈される。
 「私」は武者小路実篤のような新しく若々しい自我信奉者
 とし、武者小路実篤の「友情」は「こころ」の先生に対す
 る鎮魂歌と位置付けている。

秋山公男「『こころ』の死と倫理―我執との相関―」
 (『国語と国文学』第五九卷第二号通巻第六九六号(東京
 大学国語国文学会 一九八二・二) / 秋山公男『漱石文学
 論―後期作品の方法と構造―』(桜楓社「現・おうふ
 う」一九八七・一一))は御嬢さん論を展開する。笑いを
 無邪気と見るか、技巧と見るかで読みが大きく異なるとい
 う前提を示した上で、御嬢さん、奥さん共に先生が結婚を
 申し込みたくなるような展開に持つていこうとしていると
 解釈する。御嬢さんの笑いは挑発でさえあるとし、そこに
 我執を認めるのである。更に我執をKにも指摘し、その死
 を薄志弱行に求めることへの疑問が述べられる。己の我執
 を、先生に恋の苦悩を告白し逆襲をうける過程の中で自覚
 させられ、さらに露骨な「利己心の発現」を友人に見なけ
 ればならなかった孤独感に死因を求め、遺書で御嬢さんに
 Kが触れないのはKの潔癖な自己抑制と説明する。先生の
 倫理的贖罪の生涯、先生の自決が漱石の他のテクスト、
 「模倣と独立」『文学論』『虞美人草』『行人』『文芸と
 道徳』や書簡を駆使して論じられ、その自決は罪の呵責の
 深渊を覗き見た孤独感に求めている。

藤井淑禎「天皇の死をめぐる『こころ』その他」
 (『国文学 解釈と鑑賞』第四七卷第一二号(至文堂 一
 九八二・一一))は天皇の死をめぐる議論を試みる。当時
 の東京朝日新聞、雑誌「太陽」、また漱石の日記・書簡も

引用されるが、漱石における真の謹慎、哀悼のスタイルが不明な以上、この時期の日記・書簡類をいくら詮索してみても心の底は窺い知れず、問題とすべきは作品から何かがどの程度まで読み取れるかにかかっているとされている。作品を解く鍵は、「私」の中の最終時点である大正元年九月末と、おそらくは作者の執筆時点とも重なる「私」の回想時点Ⅱ大正三年四月とのあいだに横たわる二年足らずの歲月のなかに隠されているとの見方に立ち、原構想においてはおそらく、先生が一〇数年前の過去を血潮を浴びせかけるようにして「私」に打ち明けたのに匹敵するくらいの時間的距離が、現在の「私」と過去の「私」とのあいだにも横たわっていたものと考えられるとの見方を示している。しかし、中途からの明治四五年設定の導入によつて、「私」の成長を書き込む言説を差し挟まねばならなくなつたと結論付ける。ここには後に問題にされる時間についての議論の必要性が既に自覚されていると共に、構成の欠陥の背景をも探ろうとする姿勢も見受けられる。

関谷由美子「『心』論——〈先生〉と呼ばれた男——」（『日本近代文学』第四三集 日本近代文学会 一九九〇・一〇）『原題、「心」論——〈作品化〉への意志——』／関谷由美子『漱石・藤村〈主人公の影〉』（愛育社 一九九八・五）は研究史において、二つの手記における表現形式上の差異性に論及したものがKという頭文字以外に

ほとんど見当たらない事実注目し、表現主体の主観性が際立つ遺書に対し、「私」の手記の主眼を写実的再現性に見る。遺書には取捨選択の意志が働いており、決してありのままではなく、ある種の統合意識によつて作品化されたものであるとする。〈手紙〉の「私」という書き方には〈下〉を〈上〉〈中〉とは異なる一編の自立した作品として見るべきだという論者の立場が窺える。〈上〉では先生の「私」に対する話が核心に迫ろうとする時に障害が入り、突き詰められることなく不得要領に終わってしまうパターンが反復していることが注目され、他者を始め、現実的、日常的なものによつて容易に〈秘儀〉が汚され、相対化されるとしていられる。遺書にみられる独特の意味の矛盾・亀裂・不統一な感じが指摘されると共に、思慮分別を越える人間的衝動の欠落による本能的臆病さ、〈探偵的観察〉と人間に対する猜疑心ばかりが目立つ点にも注目が注がれる。先生は感受性の欠落者とされ、事後的に何故自分は告白しなかつたのかという激しい悔恨に襲われるパターンの反復は、どのような事後の分析もすりぬける、人間的倫理的なものの空白・欠落を明らかに示しているとし、先生が感じた罪の核心は、人間との、直接的な生きた接触が無かつた、という認識に他ならず、〈悔恨〉という至高の感情を媒介として、あくまで自我の孤高性にとどまろうと志した人間の負のユートピアを示しているとして批判的読みが試

みられる。先生の遺書執筆による自己作品化の意志は、その実生活における〈虚構意識〉〈取捨選択〉性と通底し、〈まとまりのよい〉〈感動的〉ですらある遺書風の「自叙伝」の隅々に整合の破れ、すなわち〈まとまりのつかない〉事実性を意識化しなくてはならないとする。また、Kについても外界との関係の無意味性と、とめどなく空転する自意識の過剰が生前根幹をなすとして批判される。

高田知波「『こころ』の話法」(有精堂編集部編『日本の文学』第八集〈有精堂 一九九〇・一二〉)は小森陽一「『こころ』を生成する「心臓」」(『成城国文学』創刊号 成城国文学会 一九八五・三/夏目漱石『こころ』〈ちくま文庫 一九八五・一二〉の「解説」/日本文学研究大成刊行会監修、平岡敏夫編『日本文学研究大成 夏目漱石I』〈国書刊行会 一九八九・一〇〉、「『心』における反転する〈手記〉—空白と意味の生成—」と改題・加筆の上、小森陽一『構造としての語り』〈新曜社 一九八八・四〉/玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第十巻 こころ』〈桜楓社「現・おうふう」 一九九一・四〉)と田中実「『こころ』という掛け橋」(『日本文学』第三五巻第一二号〈日本文学協会 一九八六・一二〉/田中実『小説の力—新しい作品論のために—』〈大修館書店 一九九六・一二〉)を「手記」と「遺書」の関係の構

造性を発見したものととして評価し、その延長上に話法という視座から表現構造について考察する。高田論に至ってテクスト構造についての本格的な議論が試みられていると言える。遺書で「絵巻物」化された「過去」と「過去」そのものとの間の懸隔について「先生」はほとんど無自覚であり、叔父、Kの言葉は直接話法で再現されることはなく、「技巧」が表現される静は遺書の叙述の中で声を奪われた存在とする。「先生」の遺書が他者の言葉を「前後の行き掛」から切り離して語り手の文脈の中に吸収支配する話法を骨格にして成り立っていることに対する「私」の意識の様子が発見され、他者の言葉に対して厳粛な姿勢を持つ「私」は、自分の解釈を「事実」と混同しただけの慎重さを忘れておらず、その〈物語〉が手記の中で絶対化されることをつとめて避けていると見る。執筆現在における語り手の評価や解釈の言説をあらわに示さず、また他者の言葉を「前後の行き掛」から切り離さずに場面として直接再現していくという原則にもとづいて手記は執筆されてきたが、「私」が東京行ききの汽車に乗り込むところまでで手記の時間を停止させてしまっているのは、その時間が「先生」没後にまで延びた場合、遺書を読んだ後の「私」を会話場面の中に登場させざるを得ないし、それに伴って語り手の「私」も直接的なコメントの言説を避けて通ることはできなくなつて叙述の原則が崩れてしまうからだと解釈し

ている。つまり手記執筆にあたって「私」が選びとった話法は「先生」の死後の時間を絶ち切るることによって可能な手法だったと結論付ける。

木村功「「こころ」論―先生・Kの形象に関する一考察―」（『国語と国文学』第六八巻第七号通巻第八一〇号〈東京大学国語国文学会 一九九一・七〉）は先生、Kに明治時代のある時期における青年像の特徴を見る。先生、Kを時代性・社会性の中に還元し直し、人物像を再検討すべく、「先生と遺書」の時代設定を試み、先生の青年時代は明治三〇年代で、大正元年九月の時点では上限で三七歳と算出する。先生とKが高校・大学時代を過ごしたのは日清戦争から明治三〇年代前半にかけてのおよそ六年であり、日清戦争と日露戦争の狭間にあったこの時代に鼓舞された「武士道」精神、倫理的宗教的風潮の台頭とKが漂わすストイックで求道的態度は、同時代的なものと考える。漱石は「文芸と道徳」で「維新前の道徳」観を述べるがKはそれを体現した存在で、先生と御嬢さんの婚約を知り、挫折の上での自殺とし、また先生の「倫理」的な面は「維新前の道徳」に対応し、「自由と独立と己れとに充ちた現代」人の一面は「維新後の道徳」にそれぞれ対応し、漱石が認識していた明治の道徳的な二極現象を、その分裂した性格として体現していると読む。明治天皇に対する強い一体感・共生感が伊藤左千夫、徳富蘆花らの発言から考証され、

先生が自殺へ急激に傾斜した原因は、明治の終焉によって当時の民衆が等しく抱いた不安や「危機意識」に触発され、社会との共生感覚を失ったことであつたとし、明治の精神に殉じたものとする説を否定する。

武田勝彦「漱石の東京 こころ」（『早稲田大学教養諸学論集』第九二号 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究 会 一九九二・三）「原題、「漱石の東京―こころ」を中心に」／武田勝彦『漱石の東京Ⅱ』（早稲田大学出版部 二〇〇〇・二）は同時代のコンテクストを復元すべく徹底的な資料的考察を通して先生の年齢や作品の舞台となつた小石川表町界限、本郷・下谷、下町、郡部に至るまで、当時の様子を記述する。明治末年から大正初期の東京が再現され、都市論として読める内容となっている。

松下浩幸「『こころ』論―孤児と（新しい女）―」（『明治大学日本文学』第二〇号 明治大学日本文学研究 会 一九九二・八）は先行論で排除されがちだった女性の問題系を提出する。「先生」から「何も知らせたくない」として残されてしまった「妻」||「静」という女性に着目し、フェミニズムの問題意識によってこの作品を読むとき、我々はこの作品において一度も自ら語り手となることになかった「妻」||「静」の物語として読み換えることが可能だとしている。

押野武志「「静」に声はあるのか―『こゝろ』における抑圧の構造―」（『季刊文学』第三巻第四号 岩波書店一九九二・一〇）は小森陽一「「こころ」を生成する「心臓」」（前掲）と石原千秋「「こころ」のオイティプス―反転する語り―」（『成城国文学』創刊号〈成城国文学会 一九八五・三〉／玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第十巻 こゝろ』〈桜楓社「現・おうふう」一九九一・四〉／石原千秋『反転する漱石』〈青土社 一九九七・一一〉）による問題提起を総括し、両者共に女性を抑圧する言説に加担していると批判する。先生や「私」の眼差しを通してしか静が表象されないという認識に立った上で、彼らが静をどのような眼差しで、いかなる欲望のもとに照らし出しているか、いかに静を隠蔽し、逆に男たちが彼女に脅かされているかを重視すべきだと主張する。その上で、作品を「静」抑圧が男性言説のイデオロギー性を暴き出す反転するテキストと位置付けている。

松澤和宏「沈黙するK―『こゝろ』の生成論的読解の試み―」（『季刊文学』第四巻第三号 岩波書店 一九九三・七）はK批判論を試みる。Kは崇高な宗教家を目指す禁欲的理想主義者、両親の加護を喪った苦学生といった道徳的側面からばかり論じられてきたが、「道」のために御嬢さんと結婚し、経済的安定を得て先生から「主」の座を

略奪しようとする起死回生の野心を秘めた食客でもあったとの見解を示す。先生と御嬢さんの婚約を知るに及んで、その野心実現の可能性がなくなったことが自殺の動機だったという解釈の可能性をもテキストは許容すると言っているのである。このようなKの野心をもつばら「切ない恋」の告白に読み換え、金銭的主題の浮上を抑え、恋愛と友情の相克を専ら主題とした暗く美しい「人間らしい」物語を描こうとする先生の遺書を必死の演技と位置付ける。

小森陽一「『こゝろ』における同性愛と異性愛―「恋」と「罪悪」をめぐる―」（小森陽一、中村三春、宮川健郎編『総力討論 漱石の『こゝろ』』〈翰林書房 一九九四・一〉）はかつて自らが執筆した「「こころ」を生成する「心臓」」（前掲）をめぐる三好行雄「〈先生〉はユキユカ」（『海燕』第五巻第一号 福武書店 一九八六・一一）、三好行雄「ワトソンは背信者か―『こころ』再説―」（『文学』第五六巻第五号 岩波書店 一九八八・五）／玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第十巻 こゝろ』〈桜楓社「現・おうふう」一九九一・四〉）といった反応への見解として、タブーとされてきた性の問題を論じることで読者の側が属してきた倫理を明らかにできるとし、先生と「私」、先生とKとの関係に同性愛的心情を読もうとする。当時の男性を自己実現に駆り立てた装置とし

て福沢諭吉『学問ノススメ』、サミュエル・スマイルズ『西国立志編』が、またサムライ的「男色」の世界を描いた作品として幸田露伴『ひげ男』、『葉隠』、(作者未詳)『賤のおだまぎ』が引用され、当時のコンテクストに同性愛を位置付け、友情と恋愛というヘテロ・セクシュアルな「恋」だけを認知するコードを否定する。

戸松泉「『こころ』論へ向けて―「私」の「手記」の編集意図を探る―」(「相模女子大学紀要」五七A 相模女子大学学術研究会 一九九四・三)は小森陽一「『こころ』を生成する「心臓」」(前掲)、田中実「『こころ』

という掛け橋」(前掲)による「私」の遺書編集に関する議論から出発し、一旦はその仕組みを通して立体的に読む作業が必要だと述べる。遺書は当時の記憶が取捨選択の後に再構築されたものであり、手記を書く「私」も記憶に残る当時のこだわり方と「今」のそれとの差異を見据えつつ叙述している事実が目が注がれる。また、遺書を読んだ後に〈上〉〈中〉が書かれたとすると、〈書く〉という意識的行為の中で敢えて排除されたものにも注目する必要があると述べている。執筆する「私」がかつての自己の内面の劇を再構成しつつ振り返っていることが見据えられている。書かれていない物語についてどのような議論を行うべきかが見通されていると言える。

田口律男「『こころ』の現象学」(「漱石研究」第六号 翰林書房 一九九六・五)は書記行為が根源的に孕む自己言及性や背理性、虚構性、物語世界における因果関係・時間確定の困難を指摘し、遺書のエクリチュールの起源は曖昧だとする。静にせよ、Kにせよ、先生の遺書を通してしか読者は接近できず、その遺書が矛盾をさえ指摘できる多義的な意味を内包し、「私」の手記の多義性も併せ考えるなら、作品は心を表象し再現する困難、コミュニケーションの不可能を突きつけるものだと述べている。

篠崎美生子「『こころ』―闘争する「書物」たち―」(「日本近代文学」第六〇集 日本近代文学会 一九九・五)は先生の死因は遺書には書かれていないとし、〈上〉〈中〉と〈下〉、またKの遺書と先生の遺書との間で権力が錯綜し、互いに抑圧し合う様を見極めようとする。先生が異なる解釈の前で判断を停止してしまう様子を遺書のいたる箇所を観察し、先生が二つの物語(解釈)の前で判断を停止、先送りするパターンにあることも指摘される。「先生/青年」(「書物」(男性)/非「書物」(女性))の二つの構図に着目し、前者について青年の手記が先生の遺書を相対化していることに注目すれば、静の言葉を抑圧する青年の手記の権力への目配りが不十分となって、後者の図式を補完し、逆に後者のみに注目し、静の言葉を立ち上げることのみ力を注げば、先生の言葉と青年の言

葉を「男」の論理として一括し、両者の権力関係を見えなくする結果に陥るとする。

松澤和宏「『心』における公表問題のアポリア―虚構化する手記」（『日本近代文学』第六一集 日本近代文学会一九九九・一〇）はテキストの空白に「私」による手記執筆を可能にし、不可能にもするエクリチュールの条件を透視しようと努め、自己検閲から虚構化への変貌のプロセスを追っている。先生死後の「私」による遺書公表問題につき、著作権、プライバシーの侵害の観点から論が展開され、Kという呼び方は法的倫理的配慮だとの見方を取る。

こうして収録論文を概観してみると、一九九〇年代の研究が可能性としての読みをどこまで押し広げられるかに心血を注ぐ様子が手に取るように窺え、その背後には作品世界に疑問や批判を差し挟む姿勢も確実に見て取れる。（信じる）読みから（疑う）読みへ、とでも総括できようか。しかしながら、そこには一読後立ち上がってくる初発感想に甘んじず、現前する作品世界に豊穡な意味を見出したいという熱気や執念もまた確実に読むことができるし、そのような達成から読者は読解に際する多くの指針を得られると信じる。